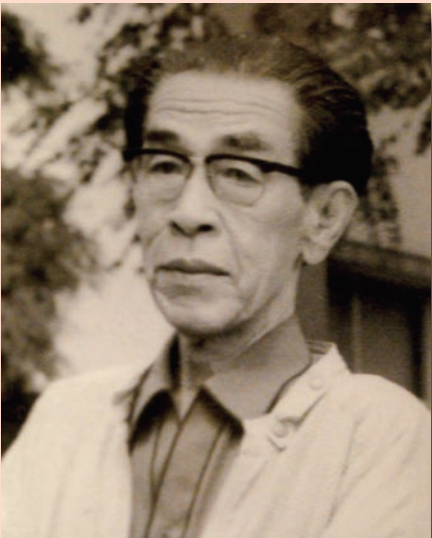


評論

おお たい せい いち
太田 静 一

山口市
(1910～2003)



【著作】

『嘉村磯多 人と作品』(昭和32・弥生書房)
『中原中也詩研究』(昭和41・審美社)
『中原中也詩における小林秀雄像』(昭和61・桜楓社)
ほか

東京大学在学中からの恩師塩谷温の辞書『新字鑑』や、平凡社『大字典』の編集にたずさわった経験と、専門の漢文から得た漢字の博識が後年の文体の確立に繋がった。文語調熟語の駆使と格調高い文章構成である。その上に或る種の自虐的逆説的なリアリズムの手法は、後に研究対象となった嘉村磯多や中原中也の作品が持つ一面にも通じる。

「都落ち」と自嘲しつつ戦時中の四国松山中学、新居浜中学に勤務。校長の背任行為糾弾運動を主導など、漱石の「坊っちゃん」先生振りの強烈な個性をもって、昭和二十一年(一九四六)終戦直後の混乱とした情勢のさなか、山口女専に着任。昭和十六年(一九四一)新設、開学したばかりの学内に新風を吹き込んだ。講義は中国文学。課外活動として、演劇、文芸、新聞部などの創設を通して、新しい女性の社会進出、男女共働の方向へ啓蒙的役割を果たした。多くの在学生、卒業生に大きい影響を与え、信奉者も出る程であった。

学制改革による科目編成の変更で、国文学演習に郷土文学研究を取り入れ、生涯執筆の主軸となる嘉村磯多・中原中也研究に学生と共に取り組む。同時に県内文学不毛との風潮を愁い総合文芸誌『文芸山口』を創刊。主宰として、最晩年まで研究評論を発表し続け、市民への評価浸透の端緒となった。

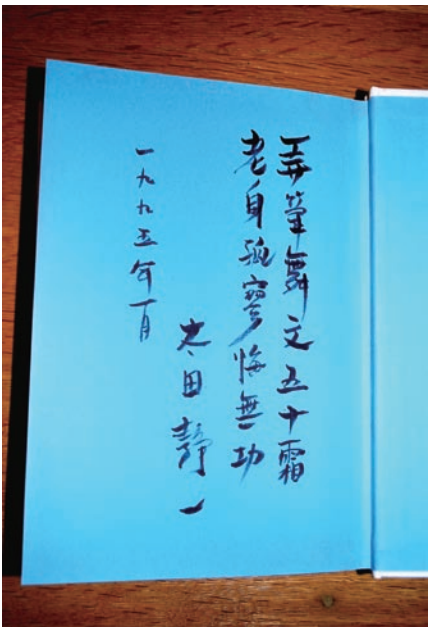
中原中也詩研究における告白詩としての独得な解釈は中央でも論議を巻き起こし、所謂大家たちからの批判攻撃には厳しいものがあつた。しかし、それに屈せず所信を貫く執筆姿勢を最後まで維持した。

当初、住居は山口女専正門前、宮野桜島の農家の敷地内寓居だったが、後に市内後河原に住み、一の坂川沿いの風情を好んだ。はる夫人の認知症発症後の自宅介護に際し、桜並木の下、手を取り合つて散策の姿が見かけられたものである。

夫人没後、体調をくずし、山口赤十字病院へ入院。長男紘一・美恵夫妻に看とられて永眠。遺言により『文芸山口』発行基金の一部が寄贈された。続刊中。文芸への熱意と、反権力、反体制への信念。常に貧しい人、報われない人、弱い人たちへの人間味溢れる

視線は、初期の創作「療養所の窓」・北条民雄・明石海人論以降、生涯変わることはなかった。

(文・福田百合子)



直筆サイン



著書

太田 静一 年譜

(提供・福田百合子)

明治43(一九一〇)年

大正14(一九二五)年
昭和2(一九二七)年

昭和5(一九三〇)年
昭和7(一九三二)年
昭和8(一九三三)年
昭和9(一九三四年)

昭和11(一九三六年)
昭和13(一九三八年)
昭和14(一九三九年)
昭和15(一九四〇)年
昭和16(一九四一年)
昭和21(一九四六年)
昭和25(一九五〇)年
昭和27(一九五二年)

昭和32(一九五七年)
昭和34(一九五九年)

昭和41(一九六六年)
昭和44(一九六九年)
昭和47(一九七二年)
昭和50(一九七五年)

昭和58(一九八三年)
昭和61(一九八六年)
平成3(一九九二年)
平成5(一九九三年)
平成6(一九九四年)

平成11(一九九九年)
平成12(二〇〇〇)年
平成15(二〇〇三年)
平成16(二〇〇四年)

昭和11(一九三六年)
昭和13(一九三八年)
昭和14(一九三九年)
昭和15(一九四〇)年
昭和16(一九四一年)
昭和21(一九四六年)
昭和25(一九五〇)年
昭和27(一九五二年)
昭和32(一九五七年)
昭和34(一九五九年)
昭和41(一九六六年)
昭和44(一九六九年)
昭和47(一九七二年)
昭和50(一九七五年)
昭和58(一九八三年)
昭和61(一九八六年)
平成3(一九九二年)
平成5(一九九三年)
平成6(一九九四年)
平成11(一九九九年)
平成12(二〇〇〇)年
平成15(二〇〇三年)
平成16(二〇〇四年)

3月5日、東京都下谷区谷中初音町に父新四郎(旧姓大野木)・母太田鶴(東京女子高等師範学校卒)の長男(姉2人あり末っ子)として生まれる。父は画業、母は教師。奈良市油留木町から大阪市谷町へ転居。
9月、父新四郎死去。以降母鶴の働きと姉の援助により進学。
3月、大阪府立北野中学校(現・北野高等学校)卒業。4月、姫路高等学校(現・神戸大学)入学。
3月、同校卒業。4月、東京大学文学部支那文学科入学。
5月、第11次『新思潮』創刊に関わる。「療養所の窓」掲載。以後昭和9年2月号まで8篇の創作・随筆・評論を掲載。
3月、同大学同学部卒業。大学院に2年在籍。
5月、平凡社『大字典』編集部。編集に従事。10月、第12次『新思潮』創刊。「心猿」掲載。以後、昭和11年8月第15号まで12篇の創作、随筆、評論を掲載。
2月、弘道館『新字鑑』編集に従事。
2月、長男紘一出生。母鶴の結婚反対、絶縁により離京。
2月、愛媛県立松山中学校(現・松山東高等学校)教諭。単身着任。
5月、結婚届出妻はる(旧姓平田)父作次郎(富山県泊町)母しの5女。
4月、愛媛県新居浜中学校(現・新居浜高等学校)教諭。
6月、山口県立山口女子専門学校教授。(山口市宮野在住)
5月、学制改革により山口女子短期大学教授。(山口市宮野在住)
2月、母鶴大阪で死去。直前に一家揃って上阪。母と対面和解。この頃、山口市後河原に転居。
11月、『嘉村磯多 人と作品』刊行。
6月、『文芸山口』創刊、主宰。以降隔月刊行。各号に磯多、中也関係の評論を意欲的に発表、刊行。まとめられた作品集は、10冊に及ぶ。
4月、『中原中也詩研究』刊行。
9月、『中原中也未完詩研究』刊行。
12月、『中原中也の詩と真実』刊行。
3月、山口女子短期大学定年退職。4月、学制改革により山口女子大学(4年制)発足。宇部市宇部短期大学教授。
3月、同校退職。
3月、『中原中也詩における小林秀雄像』刊行。
2月、『解説・中原中也の詩』刊行。
10月、『嘉村磯多の妻とせ』(共著)刊行。
12月、『留別抄』刊行。「評論・エッセイ・創作・太田文学の精髓を集めた」と称された。文章を新聞連載後に出版。
12月『落花の舞い』アルツハイマーの妻と』刊行。妻はる数年來認知症発症。介護の文章を新聞連載後に出版。
山口県文化功労賞受賞。
2月、妻はる死去。
12月5日、山口赤十字病院にて死去。墓所東京谷中霊園。
12月『続留別抄 太田静一作品集』刊行。



『落花の舞い』の舞台・一の坂川